

## 1. 玲

「イツっ……ッ……」

ここはどこだ？何が起こつて……。外の灯りしか見えない薄暗い室内。どこか埃っぽい……。

あ、ここは体育倉庫か。

「よお、玲、目が覚めたかよ」

その声は——！

「獅堂！お前！なんの真似だよ」

動こうとして、手が後ろ手に縛られていることに気がつく。

「おい！ほどけよ！お前、こんなことして——」「うるせえ！」

「いつも俺の邪魔ばかりしやがってよお」

「クラスメイトにまで手を出すのはやめろって言ってるだけだろ」

「お前に指図されんのがムカつくからよ」

そう言うのと獅堂は凶悪な顔を歪め、ピアスが連なった舌を突き出して嗤いながら言う。

獅堂司——学園一の問題児。

暴力的かつ傍若無人な振る舞いで、ほとんどの生徒から嫌われている。

家が金持ちで、バンドをやっていることもあり、さまざまな裏の人脈を持つ。

三白眼で粗暴な雰囲気を持つが、モデルのような顔立ちで、顔のいい女を片っ端からセフレにしている。

男もその毒牙にかかっているという話まで伝わってくる。

幼い頃から空手を習っており、その暴力性を長身大柄で筋肉質な肉体が包んでいる。

「ここで、お前をブチ犯すことにしたんだわ」

「は……あ……？」

「知ってつかあ？お前、クラスの女と男どもをどんだけムラつかせてるか」

「何言つて——」「あゝ、その綺麗な顔がぐちゃぐちゃに歪むのが早く見てえなあああ」

やばい。こいつ、いつも以上にイカれてる。すぐ逃げないと。

獅堂がゆっくり近づいてくる。

今だ！あいつの足を払うつもりで、右脚を使つて蹴りを放つ。

後ろ手に縛られていても、蹴りぐらいならいくらでもできる。  
ヒュッン。

「チッ」

獅堂は舌打ちしつつ、左脚を後ろに引いて躲す。

狙い通り！このまま右脚を引っ掛けて転がしてやる——。

上手くいくかと思った、その瞬間。

腹にすさまじい衝撃が疾る。

「オゴォー！……カ、ハア……」

獅堂の後ろに引いていた左脚が、いつの間にか俺の腹に突き刺さり、吹っ飛ばされる。  
いつ……息ができない……。

「ウツ…ゴホオ、ゲホオ……」

「無駄な抵抗すんじゃないよ。手間かけさせやがって」

悠然と近づいてきた獅堂に、髪を鷺掴みにされる。

ペシペシと手のひらで、頬をなぶるように叩かれる。

「玲よお、いくらテメエが強いつたって、手縛られてたらどうにもなんねえんだわ」

ようやく呼吸が戻ってきた。クツ、痛ツ……。

クソ！手さえ自由なら、こんな奴ブチのめしてるのに。

髪を掴まれて、身動きが取れない……。

考える間もなく、次の瞬間、顔を信じられないところに持っていかれる。

獅堂が履いているスウェット越しにでもはつきりと分かる、バッキバキに勃起した股間に顔を

擦り付けられる。

デ、デカすぎる――。

「俺のオナホになれよ」

「だ、誰がッ！死ねよ！変態が！」

ドゴオッ！

「オゴッ！おッエエエエッ！！」

一瞬、意識が飛ぶほどの痛みと衝撃。  
遅れて胃から吐瀉物が上がってくる。

「ゲエッ！！ゴホッ、ゲホ…オエ…ッ」

獅堂は俺の腹を右脚で思いっきり蹴りつけていた。

長身大柄で筋肉質な太い脚からくる蹴りは、凄まじい衝撃だ。

髪を掴まれて衝撃を逃せないのも相まって、強烈な痛みで意識が飛びそうになる。

「汚ったねえなあ」

昼食から時間が経っていて胃に何も入ってなかったが、それでも胃液を吐き出してしまふ。

「どうだ？ 痛えだろ？ どのいつも髪掴んで蹴り入れてやるとピーピー鳴きやがるからよ。簡単だよなあ」

涙で濡れた目を開けると、勝ち誇ったようにニヤニヤと嗤っている獅堂が、髪を掴んでいた手を離し、俺の頭を解放する。

「こ、こんなごととして、お前、も、無事ですむわけ、ないだろ……ご、ゴホオ」

「無事ってなんだ？ テメエは、オナホ落ちした後のことを考えてりゃいいんだよ」

「警備員も巡回してる……ここで大声を出したら、お前は終わりだ」

夜は警備会社委託の警備員が巡回しているし、住み込みの用務員や当直の先生もいる。

「当直は小川だろ。あいつ俺のセフレに手え出してるから、動画で脅したら何も言えねえよ。ハメ撮りなんかしやがってバカだよなあ？あとよ、この警備会社は俺の叔父が役員やつてんだよな。意味わかるよな？」

痛めつけられた体は強張り、顔が青ざめる。

なんで、こんなに用意周到なんだ。

一体、いつから準備して……。

畳みかけるように獅堂は言う。

「いつから準備してたと思ってるだろ？」

思考を読まれてる……。

落ち着け。焦るな。切り抜ける方法を考えろ。

「あのビッチをテメエが庇った時からだよ」

クラスメイトの奈々と美佳――。

俺の彼女の友達で、獅堂に絡まれていたのを助けた。

あの時からか……。

「うぜえ、うぜえ。だから、その綺麗な顔をぐずぐずにしてやろうと思ってよ」

「クズが！好きにしたらいい。だけど、クラスメイトだけはやめろ！」

獅堂はニヤリと嗤う。

「へっへっ、玲よお、そのクズに今からアナルをバチボコに拡張されんだぜ？」

猛烈な嫌悪感と反発に身を振る。

だが、それとは別に確かに感じる、どこかにある熱と疼き……。

夏月は、それが自らの秘部から発せられていることに、まだ気がついていなかった――。